



1987年6月、ストックホルム（スウェーデン）での学会（Room Vent '87）に参加した際に、ほかの西ヨーロッパ諸国も少々歩きましたので、その際、印象に残ったことを綴らせていただきます。木材にあまり関係無い内容もありますが、あらかじめご容赦下さい。

西ヨーロッパは交通網が発達していて都市の中の乗り物も非常に親切に使いやすくできていますが、都市の規模がそれほど大きくないので、今回の旅行ではできるだけ自分の足で歩くことを心がけました。また、観光地はできるだけ避け、都市では郊外の住宅地も訪ねるようにしました。

### 気持ち良く歩ける環境

西ヨーロッパの街では大変気持ち良く歩くことができます。それはさまざまな面で歩行者を優先して考えられているからようです。西ヨーロッパでは都市の中を川が流れていることが多く、そこにはたくさんの橋がかけられています。その橋のなかには必ず、歩行者専用の橋があります。その橋の床に木を用いている例も多くみられ、その上を川の流れを見ながら散歩するというのもなかなか良いものです（写真1）。そして、川の両岸には車と隔絶された緑豊かな並木道が続いていた

りします（写真2,3）。そういう環境の中にある“木製”のベンチやゴミ箱などのストリートファニチャーは、とても美しく存在しています。都市空間の中に木や水や緑を上手にとりこんでいる例が大変多く見られました。

それに比較して“わが街”旭川を考えてみますと、せっかく美しい川がいくつも流れているのに、そこにかかる橋は一、二の例を除いて車を最優先したもので、とても川を見ながらその上を散歩などする気にはなりません。ひどい場合には危なくて早くその橋を渡りきってしまいたくなるほ

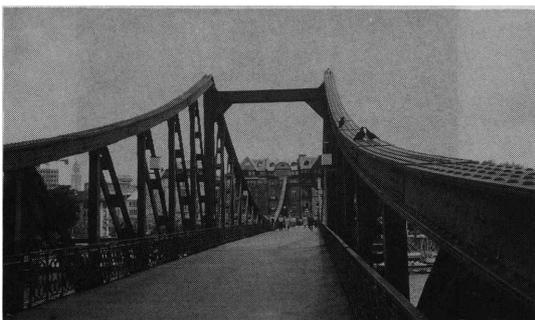


写真1 マイン川にかかる歩行者専用の橋  
（フランクフルト 西ドイツ）

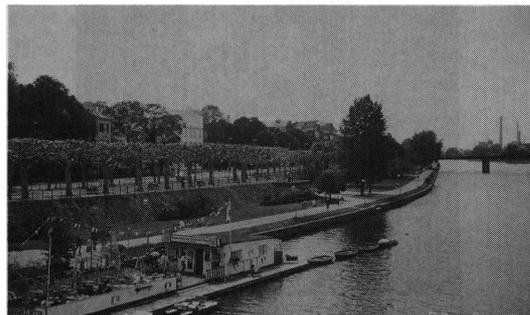


写真2 川辺の散歩道と往路樹  
（フランクフルト 西ドイツ）

どです。川边には野球場やテニスコートがただ不連続に配置され、かつ、高い土手によって川边の風景すら見えません。極端な場合にはそこに川があるのさえ分からないほどです。

旭川の街を豊かにするためには、この水边の空間を再生することと、橋のありかたを考え直すことが重要な鍵を握っているように思われます。我々の貴重な財産である川を、災いをもたらす元凶とだけしか考えないのでは余りに寂しいですから。



写真3 川边の並木道  
(フランクフルト 西ドイツ)

### 街並みの“調和”、“個性”、“木”

西ヨーロッパの都市にも、もちろんモダン建築群はありますが、その多くは計画的な都市区域の中だけに存在して新市街地を形成しています。そこ以外の旧市街地では中世の趣を残した街並みが残っていることが多いようです(写真4)。

フランクフルトの街の中を歩いていて警察署を見つけました。その建物は回りと調和のとれたものでパトロールカーが奥に見えなければ一見して警察署だとは絶対分からないでしょう。よく見ると“POLIZEI”という小さい看板がありました。警察署さえも街並みに溶け込ませていることに、街並みに対する意識の違いを見せつけられた思いでした(写真5)。

一方わが国の警察署はその建物の前には竹の棒に泥で汚れた黄色い交通安全の旗が並べられ建物の壁には“心に訴える標語”が派手に張られています。道路わきの交通安全を呼びかける旗や標語の看板もただ目立てばよいというもので、しかも汚れた古いものも撤去されずに放置されています。その実際の効果のほどは知りませんが、私の場合はそれを見るたびに、ふだんの高い交通安



写真4 街並み  
(メミンゲン 西ドイツ)



写真5 警察署  
(フランクフルト 西ドイツ)

全の意識もしぼんでしまいます。日本の街並みを壊している原因の一つに交通安全の看板があげられるのではないのでしょうか(写真6)。

西ヨーロッパの街並みを特徴づけているものはなんでしょうか、その要素がいくつかあるように思われます。

- ・壁面線や建物高さがそろっている
- ・壁面や屋根に同系色を使い、大きい面積の部分では落ち着いた色を使う
- ・電信柱がない



写真6 交通安全の看板が乱立する街並み  
(旭川市)

- ・街の中の標識や看板などのサインがよくデザインされていて落ち着きがある

以上のような要素によってその街並みは極めて調和のあるものになっていますが、その反面それぞれの建物(集合住宅などの場合には、それぞれの家庭)には個性があります。一見同じような表情をしていても各々はしっかりとアイデンティティ(独自性)をもっているのです。例えば集合住宅で、壁面の色を同系色ではあるが隣と異なる色を使ったり、ドアや窓で個性を出したりします。ある家庭では、木製の重厚なドアと窓を持ち、ある家庭では、瀟洒な木製ドアに手作りと思われる木製の鉢に真っ赤な花が飾られています。またある家庭では、子供が作ったと思われる緑色の木製郵便受けの下で古そうな木の椅子に老人が腰を掛け通りを眺めています(写真7,8)。また、戸建ての住宅地では、庭と歩道の境に手入れの行き届いた木柵があったり(写真9)、建物へのアプローチにパーゴラがあったりします。このように意識しているかどうかは分かりませんが、ちょっとした個性を出す部分に木を用いる例が多いようです。

個性を主張するのに“木”はもっとも優れた材

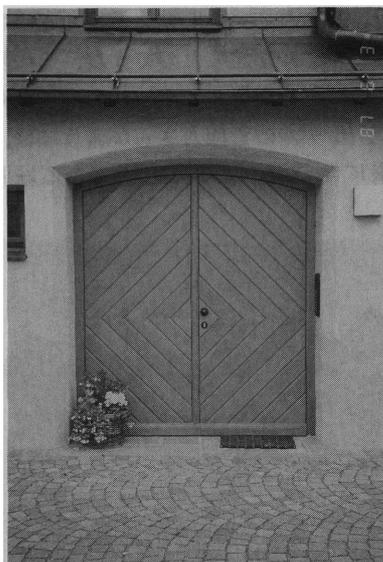


写真7 木製ドアと花かご  
(メミンゲン 西ドイツ)



写真8 個性あるエントランス  
(メミンゲン 西ドイツ)

料の一つではないでしょうか。特に現在の日本のように無機質で均質な材料があふれている中ではその価値は極めて大きいと思われます。木の使い方の一つとして、その材料としての良さを際立たせるために、工業材料との組み合わせが今後ますます重要になるように思います。

### 木とメンテナンス

木を使う際、メンテナンスについてよく問題にされます。日本ではメンテナンスフリー信仰なるものが存在して、すべてのものにメンテナンスフリーをを求める傾向が大変強いように思われます。しかし、見た目の美しさを要求される建築内外装材やエクステリアなどは、どんな材料でもメンテナンスが必ず必要になります。そして、ほとんどの工業製品は、製品が出来上がった時が最も美しく、いくら手入れをしても時が経つにつれ美しさは損なわれる一方です。それに対して、木製品の場合は手入れをすることによって製品の出来上がり時より美しくなる可能性をもっています。その点を考えますとメンテナンスが必要ということは決して欠点では無くなるように思います。さらに、そのメンテナンスによって各個人の個性を表現することもできるのです。

メンテナンスしやすい製品と各個人のメンテナンスの手助けをするシステムが整えば、逆に“メンテナンスで個性を”と売りものにさえなり得るでしょう。

西ヨーロッパの住宅地を歩いて、その手入れの行き届いた木製窓や柵などを見てみると、各個人で身の回りのメンテナンスができるだけの“時間”、“お金”、“心”の“ゆとり”が必要ではないかと強く感じました。

現在の日本でもそういう“ゆとり”を持つという傾向は強くなりつつあると思われます。そこで、木製品側から各個人のメンテナンスに対して積極的に提案する必要があるように思います（写真9）。

### 木造建築と伝統の重み

西ドイツ南部の小さな街、メミンゲンにあるコミュニティホールは日本の建築雑誌にも紹介された大変美しい木造建築です。この小さな街は城壁に囲まれていて、そのほとんどは中世の趣をとどめています。この建物の構造は、木とスチールのハイブリッド三次元トラスによって構成され、その美しい姿を特徴づけてます（写真10）。

この建物を実際に見て最も感動したことは、その美しさもさることながら、建物の中に城壁が取り込まれていることでした。この敷地は城壁をまたいでいて、もともとはビール工場があり城壁もその部分は壊されていました。ビール工場の移転に伴いそのホールが建ったのですが、その際に壊されていた城壁を再建してホールの中に取り込んだのです。ホールの管理人さんが言うには、“工場の拡張に伴い街の大事な財産である城壁を壊



写真9 木 柵  
(シュトゥットガルト 西ドイツ)



写真10 コミュニティホール, 外観  
(メミンゲン 西ドイツ)

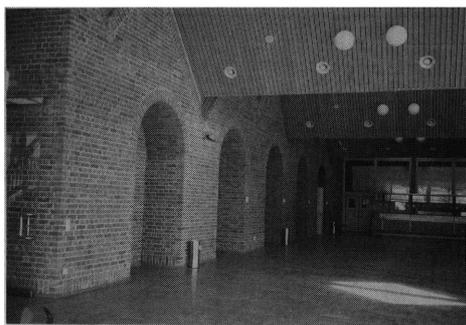


写真 11 コミュニティホール，城壁をとり込んだ内部  
(メミンゲン 西ドイツ)

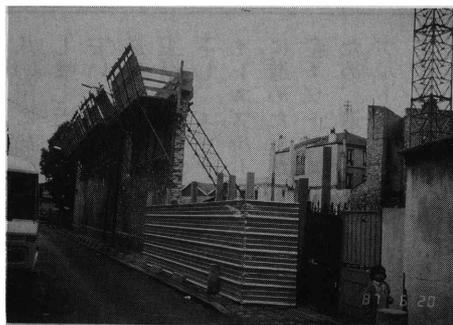


写真 12 外壁を残した改築  
(パリ フランス)

したのは大きな過ちであった。このホールの中の城壁はそういう点で象徴的な意味を持つのです……。” なんと胸にこたえる重い言葉でした(写真 11)。

パリ郊外で集合住宅と思われる建物を造っていましたが、その建物は、以前そこにあった建物の外壁をそのまま使い、内部だけを造り直していました(写真 12)。西ヨーロッパを歩いているとこのような例をたくさん見ることができます。これには街並みを守るという行政的な背景もあって道路に面する外壁だけ残す場合もあるようですが、いずれにしても、古いものに価値を見いだせるということ、そして価値を見いだせるような建物であることはとても重要なことだと思います。

西ヨーロッパでは日本に比べると住宅のストックがかなり充実していて、収入や家族構成の変化に応じて住みかえをしているようです。この際その家の価値を決定する要素の一つに築後年数があります。日本ではほとんどの場合、古ければ古いほどその価値は低く見積もられますが、西ヨーロッパではただ古いというだけで、その価値を低く見積もられることはなく、逆に、その古さが価値につながる例も多く、古くから建っていることを誇りにさえ思っているようです。

このように、西ヨーロッパを歩いていて、“伝統”とか“時間”とかの重みを痛感させられました。再開発の際に、古い建築物や大きく育った樹木を平気でつぶしているわが国の状況をかんがみると悲しい気持ちになります。

北海道の住宅および住宅地の歴史を考えてみると、その大部分を占める木造軸組構造の住宅は、次々にその工法や、流行の形が変化していきま。それは、本州で用いられている開放型住居から、北海道やさらに分化した北方圏地域にふさわしい閉鎖型住居への脱皮の歴史であり、今もその最中といえます。冬の寒さ対策のためだけの断熱、気密性能などについて、その方向は既に明らかになっています。今後は、

- ・精神的な“ゆとり”や“ゆたかさ”をうまく空間に表出させること。そのために、建物まわりや街並みを充実させること。
- ・子孫や街並みのために残しておきたくなるような、時間の経過と共にその価値が上がる住宅を創ること。そのための“木”の上手な使い方と、上述した“積極的”なメンテナンスを普及させること。

などが必要と考えます。そこでの“木”の役割は極めて大きいのではないのでしょうか。

少しでも木にかかわる者として、その可能性の大きさに胸膨らませてヨーロッパより戻ってまいりました。

ここに載せました西ヨーロッパに関する内容は、あえて良い面だけにしました。実際には、スラムもありますし、数多くの社会問題も抱えていますが、我々の良い手本となることがたくさんあることも事実です。そこで、このような良い面を掲げて、我々の身の回りのことを独断も含めて綴ってみました。  
(林産試験場 加工科)